日本は平等に向かっているのか

菊地 夏野

女性活躍推進法（女性の職業生活における活躍の推進に関する法律）が2015年に成立し、「女性活躍」という言葉もすっかり定着したように見える。折しも、その後まもなく「#MeToo」に代表されるフェミニズムが流行し、フェミニズムはすっかり社会の表舞台に席を占めたようだ。

私がジェンダー論やフェミニズムの本を読み出した1990年代の学生時代には、フェミニズムの文字がこんなにもメディアに躍る事態が来るとは夢にも思わなかった。私にとってフェミニズムは、生きる上で必要な欠かせないものだったけれど、決して社会のメインストリームに乗ることはないし、乗ることを追い求めるようなものでもなかった。それが、インターネットやSNSの普及による記事・ニュースの氾濫もあり、フェミニズムはポップでおしゃれなものに変身した。そして、政府は呼応するように女性活躍政策に乗り出し、企業に働きかけるようになった。

だが、企業の女性活躍施策は基本的に正社員女性向けのものであり、女性労働者の過半数を占める非正規労働者は置いてけぼりである。長期不況のもとで低収入層・非正規層の生活困難は激化している。そこにテコ入れすることなしに唱えられる「女性活躍」は一体何を目指しているのだろうか。

2022年、安倍元首相銃撃事件により問題化した統一教会と政治の癒着は、単なる宗教と政治の関係の逸脱ではない。信者の多くは女性であり、問題の本質は女性への暴力である。

おしゃれなフェミニズム報道がメディアを賑わす一方で、このような構造的な性差別、女性に対する暴力の不可視化は維持され、あるいは強化されているようにも見えるのは一体なんなのだろうか。コロナ禍で多数の女性が自死を選んだのは、フェミニズムの限界を示すものでなくてなんだろうか。

頭を抱える毎日である。

PROFILE

きくちなつの：名古屋市立大学教員。社会学、ジェンダー論。主著に『ポストコロニアリズムとジェンダー』（青弓社, 2010）、『日本のポストフェミニズム―「女子力」とネオリベラリズム』（大月書店, 2019）など。最新の論文は「安倍／統一教会問題に見るネオリベラル家父長制―反ジェンダー運動とネオリベラリズムの二重奏」『7・8元首相襲撃事件 何が終わり、何が始まったのか？』（河出書房新社, 2022）所収。